



スキルはコピーして 上書き最強でいいですか 3

改造初級魔法で便利に異世界ライフ

α L P H α L I G H T

深田くれと

Fukada Kureto

アルファライト文庫



登場人物紹介

Main Characters

サナト

いりさなと
(格佐奈人)

本編の主人公。

異世界転移者ながら、
清掃係として暮らしていた。
ダンジョンで新たな力に
目覚める。

アミー

第三級悪魔。

外見に反し
高い残虐性を
有する。

グレモリー

第三級悪魔。

アミーと共に
サナトの使い魔
となる。

ウェリネ

強大な力を持つ
第一級悪魔。
ある契約を
サナトと交わす。

エティル

ギルドの受付嬢。

道案内として
冒険に同行する。

ルーティア

ダンジョンコア。

謎スキル「エッグ」が
進化した存在。
実体化することも
可能。

リリス

人間と悪魔の
血を引く魔人。
特徴的なスキルを持ち、
ステータスも高い。

第一話 源泉げんせん

魔人のリリス、ダンジョンコアのルーティア、悪魔のボールとともに、バルベリト迷宮の攻略を続けるサナト。

敵の出現しない安全地帯かと思われた、四十一階層に足を踏み入れると、突如《時空魔法》の発動を察知する。

「一体、誰だ……」

サナトは近付いてくる不吉な影に思いを巡らせた。

同時に――

ボールがひっそりと口角を上げた。

直径二メートルほどの黒い渦だ。何も無い空中に、穴が広がった。

漏れ出る異質な空気が、場の緊張感を高めていく。

サナトは弾かれるように《ファイヤーボール》を発射した。

「……っ」

複数指定を行っての十連発。膨れ上がった紅玉が、開いたゲートに飛び込んだ。溢れる炎が暗い穴から吹き出す。

間違いなく何かには命中しただろう。

奥からうめき声が聞こえたが、サナトは手を止めない。素早く視線を隣に移し、二つ目のゲートを睨みつけて再びの十連射。穴が膨大な炎を吐き出した。

「先制攻撃は成功したか」

消え去ったゲートが《時空魔法》を行使した者の結末を示していた。

『危なかったね、マスター』

「ああ。また悪魔が出てくるとは。《神格眼》の力には感謝しないと。正体が分かれば遠慮はいらない」

「ご主人様、今のは悪魔のゲートだったのですか？」

「間違いない。二匹も同時に来るとは思わなかった」

「すみません。また私のせいで」

しよげたリリスに、サナトはかぶりを振った。

「氣にするな。なぜリリスを付け回すのかは分からないが、パールに比べればさっきの二人はどういうことはない。ただだか、レベル60超えだ」

「えっ、それはかなり強そうですね」

「大丈夫だ。見えたステータスはどれも1000に届いていなかった。たぶんリリスなら

一匹は相手にできたと思う。パール、さっきのやつらは知り合いか？」

「よく見えませんでしたか、名前は見えましたが？」

「一瞬だったか、アミーと……グレ……なんとかだ」

「グレモリーでは？」

「そうかもしれない。いや、確かにそんな感じだった」

「ということは、おそらく次は……」

「次？ 何か知ってるのか？ と、考える時間もくれないようだな」

サナトはパールへの視線を切った。再び《神格眼》が《時空魔法》の兆候をとらえたのだ。黒いゲートが宙に浮かんだ。

サナトとリリスが緊張感を顔に滲ませる。

「サナト様、ここは私にお任せを。悪魔の扱い方はよく存じております」

「大丈夫か？」

軽い足音とともに、待機していたパールが進み出た。何が嬉しいのか、嫌な笑みを顔に浮かべている。

開ききったゲートの正面に陣取り、腕組みをして「さあ……誰が来るか」とつぶやく。

ほどなくして、待ち人は現れた。

ゲートに押し出されるように、白衣に真っ青なストールのようなものを首に巻いた悪魔が姿を見せた。白く長い髪が肩を越えて、腰にかかっていた。

よく見ればストールは黄色い目を持つ太い蛇だ。鱗一枚一枚が青く輝き、赤い舌を出して主人の首元を移動している。

真っ白な顔に金色の瞳。女性にも男性にも見える悪魔は、目の前に立つ男をまじまじと見て、驚愕の表情を見せた。

「……バ、パール」

「おや、あなたに呼び捨てにされる筋合いはないですよ。ロキエル」

「なぜこんなところに。まさか攻撃したのは……」

ロキエルが怯えつつも、睨みつける。複雑な表情が、事態が予想外であることを示していた。

対して、パールは優しい声音で言った。

「無駄な詮索の前にやる必要があるでしょう？ 私がここにいる以上、あなたでは話にならない。すぐに呼んできなさい」

「……お断りします。あの方は大変お忙しいのです。あなたと違ってね」
「ほう」

パールの瞳が細まった。みるみるうちに暴力的な雰囲気（ふんいき）を纏う。演技か、本気か。ロキエルがのどを鳴らす。

「死にたいのですね」

腹の底から響く怒声が発せられた。

パールの背後に精巧な大蛇が三匹顔を出した。

どれもが土で作られた模造の蛇だ。しかし敵意を体现する蛇は、巨大な頭部をロキエルの青い蛇に近づけていく。

人形のような悪魔の顔に怯えが走る。

パールがにこりと表情を崩した。

「心配しなくとも大丈夫ですよ。私と呼んでいる、と一言言えば、すべてを理解するでしょう。彼女は聡明だ。ロキエルも知っているでしょう？」

「もちろんです」

「あなたが無駄な抵抗をしたら、どうなるか想像してみなさい。彼女はすぐに優秀な部下の死を知って、私を批難（ひなん）しにやってくる。それならば、部下を失わない方が良いでしょう。私も最初からけんか腰で対応せずに済む」

巨大な蛇が三方の逃げ道を塞ぐように移動し、正面からパールが近づく。わずかに低い位置に顔があるロキエルは、その圧迫感で縮こまるように身を震わせた。

「……呼んで参ります」

「それで良い。無駄な時間は彼女も嫌うところです」

ボールが興味なさそうに手をひらひらと振る。土蛇がざつと音を立てて地面に還った。ロキエルの首元をせわしなく動いていた青い蛇が、くやしげに威嚇音をシューツと鳴らした。

「さすがに早い」

ゲートが現れ、流れるように二人の人物が姿を現した。一人はロキエル。

そしてもう一人。

眉のあたりで切りそろえられた薄桃色の髪が見えた。続いて頭に生えるねじくれた二本の黒い角。後頭部で束ねた髪留め。

切れ長の瞳がこの場にいる人物を一瞥し、とがった耳についたピアスが揺れる。物静かな雰囲気とは対照的な魅惑の漆黒の衣装。腰に巻いたラップスカートに似た衣装の間から、太ももを覗かせている。

「嫌な場所ね」

色とりどりの花が混じる草原をゆつくりと見回した悪魔は、場違いな発言を口にした。

(またとんでもないのが出てきたな……)

サナトは舌を巻く。

《神格眼》で感知してから現れるまでが早すぎる。恐るべき《時空魔法》の使い手だ。レベルもボールとほぼ同じだ。

ロキエルに怯えた様子が見られない。顔には「ざまあみろ」という優越感が浮かんでいる。何年ぶりかしら。ロキエルを脅してまで何の用？」

気怠さを交えた声が、ボールに向いた。

「ウエリネ、順番が違います。もともとロキエルが用を済まそうとしてここに現れたのです。私が偶然に居合わせたにすぎません」

「あなたの偶然ほど信用できないものはないけれど、まあいいわ。ロキエルはなぜここに？」
ウエリネが部下の言葉を待つ。

「それが、異常な《源泉》の使用を突き止めたので、部下を向かわせたのですが、ボール様に殺されたのです」

「異常な《源泉》？」

「はい。対価無しに異常な攻撃力の魔法が何度も使われています」

ウエリネの切れ長の瞳が細まった。「対価無しに」という言葉を反芻し、ボールを冷や

やかに見つめた。

「何をやったの？」

「私ではありません。そちらにいるサナト様が原因です」
笑みを深めたパールは、さらりと事実を告げた。

第二話 源泉2

「相変^{あひか}わらず遊びが好きなことは分かったけれど、人間^{にんげん}ごときに《源泉》の力をどうこうできるものではないでしょう？」

「何にでも例外は存在するのですよ。サナト様はその力を持つておられるのです」

美しいウエリネの顔に疑惑^{ぎぎ}が満ちていく。

「パール、さつきからその呼び方はどうなっているの？ 言葉遣いもおかしいし。なに？ この人間と契約でもしたの？」

「いえ。契約の方ではなく召喚^{しょうかん}です」

「しょうかんっ!？」

驚愕^{きやうがく}の声をあげたのはロキエルだ。青い蛇が肩で飛び上がった。

ウエリネが、鼻で笑う。

「あなたが《悪魔召喚》の意味を分かっているとは思えないけど？」

「もちろんです」

「第一級悪魔が人間に負けたとでも？」

ウエリネの切れ長の目が、サナトに向けられ、隣で身を固くするリリスを一瞥^{ひとみ}する。そして「冗談はよして」と肩をすくめた。

「その魔人と人間が協力しても無理^{むり}だわ。無抵抗で殴^{なぐ}られ続けたわけ？」

自分の言葉を想像^{さうぞう}したのだろう。何が琴線^{きんせん}に触^ふれたのか、小さな笑い声を漏らした。

だが、パールは真面目^{まじめ}くさった態度で言う。

「疑^{うたが}うならば試^{ため}してみればどうですか？ 全力でやることを勧めますが」

「そう……」

途端^{たつたん}、ウエリネのラップスカートが波打^{なみ}った。ロキエルが後方に距離^{きょり}を取ると同時に、場^ばに竜巻^{たつまき}が吹き荒^あれた。

風の塊^{かたまり}がサナトを呑^のみ込む。轟轟^{こうこう}と重低音を響かせ、草花が無残^{むざん}に姿を消していく。巻き上げられた土砂^{どしゃ}がばらばらと音を立てて落下した。

「勝手に巻き込んでおいて、いきなり攻撃とは」

風がやむ。金色の盾^{そで}に囲まれたサナトが苦々^{にくが}しい表情で腕組みをしていた。

ウエリネと数秒睨み合い、ボールに視線を向ける。

「今のは、俺の命が危険だぞ。守るべきだろ」

「ご心配には及びません。サナト様ならあの程度、見当も同然。無傷は確信しております」

「……勝手なやつだ。で、ウエリネとやらは満足したのか？」

悪魔が「驚いたわ」と両目を見開き、唇を舐めた。金色の瞳に、ゆつくりと興味深さが混じってくる。

「《時間停止》」

「《時間停止》解除」

音もない魔法。場の時間が奪われかけ——対抗魔法によって元に戻った。

「その手はもう知っている」

「そう……誰が手の内を明かしちゃったのか聞いてみたいものね。しかもなぜ《時空魔法》まで使えるのかしら」

ウエリネがボールを流し見た。批難するような声色だが、顔は笑っている。そして、何かを確かめんとサナトに近づいていく。

「待て。それ以上近づくな宣言布告と判断する」

「まさか。そんなつもりはないわ。近くで見たいだけよ。それくらいなら構わないでしょ？ あつ、言っとくけど、魔人の子が手を出したら私が宣言布告だと判断するからね」

動こうとしたリリスを目線で制し、ウエリネは堂々と歩を進めた。

サナトは警戒をしつつ困惑する。

おかしい。近くなるほどなぜかウエリネに惹かれていく。思わず自分から進み出そうになるほどに。

異常に親しみを感じる状況があまりに不自然すぎる。

弾かれるように魔法を使用した。

「《神癒の領域》」

まばゆい巨大な円形の光が現れた。うつろな表情に変化していたリリスの焦点が合わさる。

遅れてサナトが大きく息を吐いた。

「自然に魅了状態にしてくるとは。《精神操作》とは恐ろしいスキルだな」

《神格眼》ではウエリネから伸びる無色の矢印だけが見えていた。だが、何の魔法かと訝しむうちに状態異常をかけられたのだ。

気づけば、ウエリネは目と鼻の先だ。顔には微笑が浮かんでいる。

ウエリネがほっそりとした腕をサナトの肩に伸ばした。

白魚のような指が、灰色のローブの上から当てられた。

人差し指と中指、そして親指の三本が、蟻でもつまみあげるようにすると——

「っ……お前」

「ふふふ」

万力で締め上げるような力がサナトの左肩にかかる。骨がみしみしと嫌な音を立て、痛みに顔が歪む。

しかし、妖艶に微笑む悪魔は手を緩めない。

肩甲骨に爪先を食い込ませながら、地面に押し付けんばかりに力を加えていく。

一気に脂汗を流し始めたサナトは、痛みに抗いながら目の前の悪魔を睨みつけた。片膝がその重みに崩れた。

ウエリネの表情がますます喜悦に歪む。

「ご主人様っ！」

「動くな！」

リリスが怒りを露わに大地を蹴った。だが、サナトは右手をあげて必死に制する。

（ウエリネはボールと同格。ロキエルは少し下。部下も大勢いるだろう。仮にボールがウエリネを押さえても、敵が多い。リリスが危険だ）

サナトは苦痛に顔を歪め、あざ笑う悪魔を見上げた。決して負けを認める表情ではない。何かが砕ける音が場に響いた。

サナトの両目が大きく見開かれ、苦しい息が漏れた。ウエリネが満足そうに瞳を三日



月型に細め、踵を返した。

「ご主人様、大丈夫ですか?！」

リリスが駆け寄った。サナトは額を汗で濡らしながら、「大丈夫だ」とつぶやく。一瞬にして白い光が身を包んだ。爪痕から流れ出た血がぴたりと止まり、みるみる傷口が塞がる。

ウエリネが感心したように振り返った。

「回復もお手の物ってわけね。でも——」

いらだった様子でボールを睨め付ける。

「多少戦えそうなのは認めるけど、この程度なら殺せるはずよ。ステータスそのものの体の造りじゃない。あなた、この人間で何がしたいわけ?」

「ウエリネ、少し耳を貸してください」

「はあ?」

ボールは静かに近づくと耳打ちをした。

「……本気?」

ウエリネが真剣な顔で問いかける。冗談めいた雰囲気が出た。

「本気です。対価としては十分でしょう? ウエリネが少し協力してくれば確実です。

この程度ならあなたの力でできるでしょうし」

「約束を違えたら?」

「約束とは契約も同様。私に不履行などありません」

ウエリネが俯いて考え込み、ため息をついて顔を上げた。ざらつく瞳。隠しきれない野心が見て取れる。

「いいわ。協力してあげる。でもどの程度のものになるか分からないわよ」

「それは承知のうえですが、十中八九、今以上にはなるでしょう」

「そう。サナトって人間はそれができるのね? ロキエル、ちよつとこっちに来なさい」

白衣の悪魔がすばやくウエリネの元に近づく。

何が始まるのだ、と緊張感が滲み出ている。

「待て。俺にも説明しろ。当事者を無視して悪魔だけで話を進めるのはまったく気に入らない」

リリスを伴って近づいたサナトをウエリネが眺める。

呆れとも感心ともとれる表情だ。

「骨まで砕いたのに元気ね。普通の人間なら二度と私に近づかないわ」

「身勝手な暴力は何度も体験しているからな」

皮肉に笑うサナトに、ウエリネが「傲慢にならないわ」と微笑んだ。

「でも、引かない姿勢は悪くないわ。いいでしょう。悪魔の深淵を覗いた人間よ。少しは

かり説明してあげる。第一級悪魔の私がね」

第三話 源泉3

世界には魔法が存在する。

それは己の意志を貫くための技術であり、外敵から身を守る術だ。モンスターが跳梁跋扈する危険な地域で、ひ弱な人間が生活するためには必要不可欠なものである。

だが、人間という生き物は強欲だ。

誰かを守るための魔法を自己の欲望のために使う者が現れる。

金のため。領土のため。栄達、名譽、誇り。欲望とは限らない。求めるものが多いほど魔法を多用する。

冒険者が現れるようになると、己の武力を示すために、また魔法を重ねる。

圧倒的な魔法。逃げるための魔法。魔法の種類は数多い。

だが、悪魔にとってはどれも同じなのだ。

人間が消費するMPは、彼らにとって生きる糧だ。

だからこそ、悪魔は古来より自分達の存在を維持するために、様々な方法で魔法を使う

人間を増やそうとしてきた。

魔界で最弱に等しい魔物を人間の世界に放ち、繁殖させ、根付かせ、生活の場を危険な場所へと変化させた。

弱者同士の生存競争を煽り、戦いがなくならないように。

一方で、初級魔法を誰もが簡易に使用できるよう金で買える仕組みを作り、武器を与えた。魔法とは素晴らしい、身を守るために必要だと誘導したのだ。

争いの絶えない世界で生きる人間は、易々と誘導に乗っかり、魔法を身近なものとして認識する。

どこかでモンスターや人間が殺され、その数だけ魔法が飛び交うことが当たり前となるのだ。

そして――

悪魔達は日々MPを吸収し、繁栄していく。

「その話が、『源泉』とどう繋がるんだ？」

サナトが疑問を呈した。

ウエリネがくすくすと笑う。

「簡単よ。『源泉』というのは悪魔そのもののなの」

「悪魔そのもの、だと?」

「純粋な人間は、単独では魔法が使用できない。でも、身勝手に他者を攻撃することにかけて、人間は他の生物とは比較にならない素晴らしい才能を持っている。進んでMPを与えてくれる生き物を放っておくと思う？」

ウエリネがあざ笑う。人間の存在そのものが悪魔のためにあると言わんばかりだ。鮮やかな口唇がぬらぬらと艶を帯びていた。

『源泉』っていうのはね、『MPを対価に魔法の力を貸し与える悪魔』と思えばいいわ。たとえば、あなたの場合は――」

ウエリネが、隣に立つロキエルに目配せをした。青い蛇がシューツと一鳴きする。

「貴様の場合は、第三級悪魔グレモリーだったのだが、死んだために私に移譲されている」「つまり、魔法を使うと知らないうちに悪魔から力を借りていると？」

「そうよ。悪魔を忌み嫌いつつ、魔法を使用しているのだから笑わせるわ。使えば使うほどにMPは私達に渡され、魂が剥がれていくの」

「待て。MPの話は理解したが、『魂が剥がれる』とはどういうことだ？」

ウエリネが、にいつと三日月形に口を曲げた。壊れるような表情には狂気を感じる。

パールが小さく舌打ちを鳴らす。

「それは話す必要がないではありませんか？」

「いいじゃない、せっかくだし教えてあげれば。知ったところでどうすることもできない

のだから」

「おしゃべりなのは変わりませんね」

パールが肩をすくめた。「止めなくていいのですか？」とロキエルに問われたものの、「好きにしてもらいますよ」と笑うだけだ。

意気揚々とウエリネが続ける。

「MPっていうのは魂が剥がれる際の残滓なのよ。悪魔にとっては前菜みたいなものかしら。少ないけど、一時的な満足感を与えてくれるもの。でも、メインディッシュは魂よ。

特に人間の魂は美味だわ。足掻いた魂ほど――」

「ウエリネ、あなたの好みは置いておきなさい」

「あら、ごめんなさい。パールに止められるなんて……えつと……要は魔法を使うほど魂が剥がれて、完全に剥ぎ取れる状態になったら担当の悪魔が回収するってこと」

「人間を殺しに行く、と？」

「魔界に連れて帰ってからね」

「どの程度魔法を使えば、その……魂が剥がれるんだ？」

「それが問題なのよねー」

ウエリネが悪戯っぽい表情で、艶のある唇に人差し指を当てた。金色の瞳が怪しく光る。「魔法をちまちま使うだけじゃ、なかなか到達できないのよ。寿命の短い人間なら五十歳

を超えてからかしら。神級の魔法を使える人間もまずいないしね」

「……神級の魔法だと、剥がれるのが早いのか？」

「初級より神級は格段に速度が上がるわ。でも、もつと手っ取り早い方法があるの。それね——死ぬことよ」

リリスがはっと息を呑んだ。何かを恐れるようにサナトの横顔を見やる。

「一度死ぬこと……だが、蘇生^{そせい}アイテムがある。ボス部屋でも一度目の死は無かったことになるはずだ。どちらかと言えば死を救済する仕組みのはずだ」

「だから都合がいいのよ。一度死ねば、魂は肉体から剥がれやすくなる。そうなれば私達も回収しやすいわ。でも、あつさり死なれると回収できずに終わることの方が多いのよ」

「その言い方だと、まるでお前達が、死んでもいいと思える環境^{かんきよう}をわざと作っていると聞こえる」

ウエリネがパンつと両手を合わせた。

金色の瞳が一層輝き、出来の悪い教え子をほめるように言う。

「ようやく気付いたの。正解よ。蘇生アイテムも、ボス部屋も、すべて人間が死んで大丈夫な環境を作るためにあるの。何度も蘇^{よみがえ}つてくれれば、魂は綺麗^{きれ}に剥がれて、私達は苦勞せずに済む。《源泉》を担当する悪魔が流れ込むMPを捕捉^{はそく}して、使用者の魂の状態を見ながら絶好^{ぜっく}のタイミングで姿を現す。そして——ジ・エンドって感じ」

けられらと笑うウエリネは子供のようだ。

重大な世界のシステムが悪魔の都合に合わせて作り上げられているという事実を、サナトはゆっくり自分の中で咀嚼^{そしやく}する。

隣で驚愕しているリリスは声も出ない。

「お前達が出向いて、無理やり蘇生アイテムを持たせて殺した方が早いんじゃないのか？」

「そうできたらいんじゃないかね。私達悪魔は——」

「ウエリネ、そこはさすがに禁止ですよ」

声を落としたウエリネに向けて、パールが素早く制止の言葉を発した。

口にできない事情があるのだろう。貝が閉じるようにウエリネが口をつくむ。

サナトが話を交える。

「なるほど。とにかくお前達が現れた理由は分かった。つまり、俺が使っている魔法は、消費MP1に対して攻撃力が500だからおかしいと。対価も無しに膨大な力を借りていると言いに来たわけだ」

「そう。ロキエルはイレギュラーを排除^{はいじょ}したうえで、あわよくば魂も回収しようとしたのかしら？」

「はい」

ロキエルが舌なめずりし、青い蛇が獲物^{えもの}に誘われるように、体の上半分をサナトに伸ば

した。

リリスが危険を察知し、バルディッシュを構えてすばやく前に立つ。

「確かに……あなた、少し剥がれているわ。その年齢で無茶をしているのね。一度死んだのかしら？　そういえば、アミーとグレモリーを殺したのは本当にバールなの？　もしかして……」

「察しがいいですね。それもサナト様です。高威力魔法の連発を受けて、彼らはあっさり死にました。まあ第三級ではひとまりもないでしょう」

「ふーん。それが事実ならグレモリーは困っていたでしょうね。一方的に借りられるだけで対価が無いのは初めての経験でしょうし。そのうえ、ようやく居場所を突き止めたと思えば、まさか返り討ちに遭うなんて。不憫な子」

言葉とは裏腹に、ウエリネはくすくすと笑い声を漏らした。
面白くて面白くて仕方ないと言わんばかりだ。

ロキエルがわずかに眉をひそめた。

「で、その異常な魔法を使う俺をどうするつもりだ？」

「殺す、と言いたいところだけど、バールとの約束があるので対応を変えるわ」

「約束の内容は？」

「それは話せない。まあ、いずれ分かるでしょう。まず、やらないといけないことは――

ロキエル、《源泉》の権限を私に渡しなさい」

「……え？　人間の《源泉》をウエリネ様が？　それなら、バール……様にやってもらえば」

ロキエルが心配そうな様子を見せるが、ウエリネは薄く笑うだけだ。

「私がやると言ったら、さっさとよこしなさい。系統が違えばできないことくらいは知っているでしょう」

「……承知しました。『第二級悪魔ロキエルより、個体名サナトの《源泉》を第一級悪魔ウエリネへ移譲します』」

「承諾するわ。本当に久しぶり。人間の《源泉》を引き受けるなんて何百年ぶりかしら」

迷いのない美声が全員の耳朶を打った。

悪魔同士の契約とは、唯一のルールを除けば、人間のものと変わらない。

たつた一言で、サナトの魔法の《源泉》はロキエルからウエリネに渡された。

サナトが、その変化を確かめようと《ファイヤーボール》を明後日の方向に放つ。

炎弾が岩肌到大穴を開けたが、特に変化は見られない。

ウエリネが腰に手を当て、呆れたように言う。

「三級悪魔だとあなたの魔法の反動に耐えられないから私が代わっただけで……威力は上がらないわ。圧倒的な力の容量を持つっただけ。強力な魔法になると思ったのなら残念だったわね」

「ところが、サナト様の場合はそうではないのですよ。くくくく」
 笑いを必死に堪えていたバールが声をあげた。いかにも「してやった」と顔に書いてある。
 ウェリネの訝しむ声が響く。

「……どうということ？」

バールは、にやにやと嫌な笑みを消さずにサナトに向き直った。

「サナト様、魔法の攻撃力をルーティア殿の力で上げてしまってください」

「威力を？ ……分かった」

首を傾げながらも、サナトは目をつむった。中にいるルーティアに指示し、『ファイヤーボール』の威力の変化を試みる。

予想外の話に、ウェリネが声をあげた。

「ちよっと待ちなさいよ！ ルーティアって誰よ。神級の魔法でも500が限度なんですよ？」

その場に虚しく反響した言葉に、誰もが黙りこくった。

サナトがようやく目を開けた。

「いや、どうも500を超えられるつばいぞ。どこまでかはまだ分からないが」

「……えっ？」

ウェリネの切れ長の瞳が驚くほどに丸く変化した。

「くくくく……ユニークスキルである《魔の深淵》を持たないウェリネは、魔法の攻撃力が見えませんか。無理もない。普段自分が使う魔法の攻撃力すら知らないでしょう？」

「さつき、上限は500だって言ったじゃない。……まさか」

「それは第三級悪魔が《源泉》を担当した場合です。我々の神級魔法の攻撃力は500を軽く超えます。その程度で収まるはずがないでしょう？ ありがたい話だ。自ら奪われるだけの《源泉》を買って出てくれるなんて。上位者から下位の悪魔に譲渡はできませんから、ウェリネから渡せる悪魔はおりません。いるとすれば……いえ、これは言いつこなしですね……くくくく」

「バ、バール、あなた、私を騙したわね？」

「まさか。『あの人間が使う魔法の威力は？』と聞かれたので『500です』と答えたまで。同格の悪魔を騙すなどんでもない。人間が使う神級なら何発使っても大丈夫だ、と豪語していたのですから、しっかりサナト様の《源泉》を担当してもらいましょう」

「あなた……覚えてなさいよ」

「まあ、ウェリネなら、たまに息切れする程度で済むでしょう」

ウェリネが掴みかかろうとするのを、バールが身軽な動作でかわす。

徐々にその速度が上昇していく。

「結局、魔法の攻撃力はどこまで上げていいんだ？ 3万くらいまでは上がると確認でき

たようぞ？」

「待ちなさいっ！ そうね……500はあれだから……その倍の1000くらいにしておきなさい。いくら私でも回復には時間がかかるわ」

「サナト様、ウエリネの言うことなど聞き流して構いません。見積もりが甘すぎます。私の見たところ、連発を考慮しても3000は可能はず。一人で何千人の人間の《源泉》を担当する悪魔もいるのですから、サナト様一人くらいなら大丈夫です」

「それは本当に初級や中級ばかりの話でしょっ！ サナトの場合は対価がMP1なんですよ!? 割に合わないすぎるわ!」

だんだん厳かな雰囲気は崩れてきた。

サナトは大きくため息をついた。ふと、微動だにしないロキエルを見ると、目が合った。人形のような白い顔に、何とも言えない感情が浮かんでいて、ロキエルはさっと目をそらした。

「リス、どう思う？」

「……私にはよく分からないです。でも、ご主人様がまた強くなるってことで、いいんですよ?」

「たぶんな。攻撃力3万を使うと、ウエリネはどうなるんだろうな」

『もし力の奪われすぎでウエリネが死んじやったら、マスターの《源泉》担当はいなくな

るんだよな? 魔法使えなくなるのかな?』

「確かに。《源泉》を渡せる者がいないって言ってたもんな。それは困る……やつぱり3000くらいにしておくか」

「そうですね……それがいいと思います」

サナトがしばらく考え込んでから、顔を上げて言うと、リスも同意した。

置いてけぼりのロキエルが主人の姿を目で追っている。

どこことなく青い蛇が寂しそうだ。

一方、第一級を名乗る二人は、戯れるように様々な場所を高速で移動している。案外、仲は良いのかもしれない。

「ルーティア、《ファイヤーボール》の攻撃力を3000で固定してくれるか？」

『はい』

世界で神級と呼ばれる魔法を遙かに超えた魔法が生まれた瞬間だった。

第四話 その瞳とそ

ウエリネとロキエルが去っていった。

その場にずっと生じていた圧迫感が消え去り、誰かが大きく息を吐いた。

「結局、あいつらは目的を果たしたと言えるんだろうか……」

「ご主人様が強い魔法を使うのを止めたかった、という風に言っていましたけど、ウエリネさんに《源泉》を交代しただけなんですよね？」

「みたいだな。ウエリネが担当してくれると威力が上がるみたいだから、願ったり叶ったりなんだが……魔法を使えば使うほど魂が剥がれると言われると……うーん」

サナトが腕組みをしながら悩ましい表情を作る。

MPとは魂が剥がれる際の残滓。毎回MPを1しか消費しないのならば、剥がれる速度は人より遅いことになる。

だが、行きつく先は変わらない。

いずれ魂の回収にやってきた悪魔に殺されて終わりだ。

「……とは言ってもな」

人よりステータスが劣るサナトは魔法に頼らざるを得ない。

これからどうなるのかと心配する気持ちはある。しかしどうもイメージが湧かない。

魂と言われても、見えない者にとっては実感が無いのだ。

そして話の通りならば、やって来た悪魔を返り討ちにすれば事が済む。

まだ死ぬわけにはいかないと駄々をこねればいいのだ。

サナトは一通り考え、ぐるりと首を回した。

「俺の魂が剥がれたら、ウエリネが回収に来るんだろうな」

「もしそうだったとしても、私がサナト様の前に立ちますので、問題ありません」

「ボールが？」

「意外ですか？ サナト様とは私が先に契約を交わしています。ウエリネであれ、他の悪

魔であれ、魂を渡すわけにはいきません」

ボールの金色の瞳がすうっと細められた。

焦点が微妙にずれ、サナトの体の中心に向けられている。

私のものだと言いたげだ。□元がにんまりと歪んだ。

「《悪魔召喚》のことか？ 悪魔を倒したら与えられるものだと言っていただろ」

「その通りです。ただ、スキルの取得と同時に自動的に悪魔との契約も発動しますので」

「つまり、自分が死んでも、タダでは転ばないシステムってことか」

殺そうとして返り討ちにあつたとしても強制的にスキルを押し付ける。

ひどい押し売りだ。

「《源泉》を担当する悪魔と争いにならないのか？」

「順序としては、暗黙のルールで契約が優先。《源泉》は二番目です。そのため、気に入っ

た魂を見つけた場合は積極的に契約を持ちかける場合もあります」

悪魔に気に入られることは幸運ではないが、要は青田買いだ。

隣で耳を傾けていたリリスがパールを見上げた。瞳は憂いを帯びている。

「あの……ご主人様の魂が連れていかれるというのはどうにかならないのですか？」

「どうにもなりません。魔法を使用する対価ですから」

悪魔がばつさりと切り捨てる。

サナトがリリスの頭にぼんと手を置いた。

「大丈夫だ。ウエリネの話では先のことだ。死ななければ魂が剥がれる心配もなさそうだしな」

努めて明るくふるまうサナトに、リリスは小さく「はい」と答えて俯いた。だが、すぐに「ううん、ダメだ」と、顔を上げる。

青と白の特徴的な鎧が静かに音を立てた。サナトの前に回り、はつきりと告げる。

「……私が必ず守ります」

「リリス……そんなに心配しなくて大丈夫だぞ。桁違いの魔法も、盾もある。いざとなれば逃げることもできる」

「それでも、です」

まっすぐな瞳には力が込められている。

サナトは嬉しそうに顔を綻ばせた。

細い腕、細い足。静脈が透けるほど白い肌。単独で悪魔と張り合える冒険者には見えない。かすかに色づく桃色の口唇は、何かを言おうとして言葉を呑み込んだ。

（手に入れて良かった。出会いに感謝しないと）

さっきの悪魔との一幕は、一歩間違えば死に繋がっていた。それは二人に言えることだ。薄氷を踏むかのような緊張感の中で、普通の人間と変わらない彼女は多大なプレッシャーを感じていたはずだ。

しかし、リリスは決して萎縮していない。

小さな体に不釣り合いのバルディッシュシュを、意のままに操って敵を倒せる仲間。誰にも負けないその美しい容姿。

そんなものはリリスの付属品に過ぎないのだ。

サナトは、この意志の強さが何よりもまぶしかった。

異世界に転移し、強くなると自分に言い聞かせつつも、あきらめかけていた。

美しいほどに澄み切った薄紫色の瞳にはサナトの顔が映っている。この瞳が純粋に力を求めた頃の気持ちを思い出させてくれるのだ。

「リリス、ありがとう」

「……ええっ!? ご、ご主人様……あの、そ、その……」

サナトは手を広げて、細い体を抱きしめた。

リリスが突然のことに目を白黒させ、手を彷徨^{さまよ}わせる。顔は朱色^{しゅいろ}に染まっていた。

サナトは離^{はな}さない。言葉にできない感謝を言い表すように、無言でぎゅっと力を込めた。

「ご主人様……」

ゆつくりと、リリスの腕が大きな体を受け入れた。おずおずと腰に手を回し、迎^{むか}え入れるように頭を預ける。

「どういたしまして」

リリスは優しい声色で言った。

第五話 敵にならない

現れる敵とは隔絶^{かくせつ}した力の差があった。

四十二階層に降りて、何十発放っただろうか。

《ファイヤーボール》が唸^{うん}りをあげて敵を抹殺^{まっさつ}する。

見慣れた光景だ。だが体内を巡る魔力の流れは明確に違う。淀みなく、力強い。

《源泉》が変わって以来、魔法が己のイメージを軽々と超えていく。サナトは思わず、満

足感から笑みをこぼす。

「すごい力だな」

『ほんとすごいよね……今までは無理に力を絞り出す感じだったのに』

「使ってみて分かる変化だな。こうまで違うとは」

曲がり角からサルのようなモンスターが顔を出した。

敵は炎弾一発で消滅^{しょうめつ}する。

続いて、背後に隠れていた一匹に気づいたリリスが飛ぶように駆けた。

左下から振り上げられるバルディッシュ。衝撃^{しょうげき}とともに、モンスターが真^まつ二つになる。

「ご主人様っ、階段がありましたー」

「もう、そんな場所か。次は四十三階層だから、敵のレベルは38だな。……思ったんだが、冒険者でそれくらいのモンスターと渡り合えるやつはいるんだろうか」

『さあ?』

「どうでしょう。同レベルなら少しは戦えるとは思いますが、囲^{むす}まれると難しいのでは」

「だろぅな……」

「ご主人様、それがどうかしたのですか?」

「いや、何でもないさ」

サナトは軽く肩をすくめて歩き出した。

（すでにリリスはレベル59。このエリアの敵は相手にならないだろう。それに、やはりレベル以外に潜在能力みたいなものがあるな……）

ちらりとリリスを横目で窺う。力の値が1000を突破した。

白い手には、不釣り合いな大きさのバルディッシュ。

最初は違和感があったようだが、馴染んだようだ。

敵を一撃で屠るその姿は、小さな魔人そのものだ。

（迷宮の地形を考えれば、もうすぐ底に到着する。そうならば……リリスのことを外で自慢したいような、したくないような複雑な気持ちだな）

「ご主人様？」

「何でもない」

リリスがサナトを見つめていた。美しい髪と同じ薄紫色の瞳に、疑問の色が浮かんでいる。

サナトは慌てて咳払いをしてごまかす。

「サナト様」

赤髪の悪魔が名前を呼んだ。

「どうした？」

「わずかばかり御身の元を離れてよろしいですか？」

サナトは面食らった。

しばらく共に行動すると言った悪魔が、ここで離れるとは思っていなかった。

「理由は？」

「探し物があります。それに、今のサナト様ならこの迷宮に敵はいないでしょう。リリス殿もそばにおりますし」

パールがリリスをしばらく見つめ「私が不在の間に主を死なせることのないように」と告げた。

「探し物と言ったが、それは何だ？」

「申し訳ありません。見つかるかは運次第なので、今は差し控えていただきます。最初にお約束した通り、命の危険が無い限りは勝手に行動させていただくことがございます」

パールは微笑みながら優雅に頭を下げた。

サナトは堂々たる態度に苦笑いする。

「また何かたくらんでいるのか？」

「どうでしょう。案外行き当たりばったりかもしれません」

「あり得んな。ウエリネやロキエルが来ると分かっていたようだし、今思えば、迷宮で俺に何度も《フレアバースト》を撃たせたのもそれが理由じゃないのか？」

「黙秘させていただきます」

パールは多くを語らない。

サナトはひらひらと手を振った。

「なら、さつさと用事を済ませてきてくれ。そうしないと、リリスとルーティアも張り合
いがなくなる」

「ありがとうございます。では早速」

サナトは《悪魔召喚解除》を使用した。

ボールが暗い《ゲート》を開き、中に歩を進めた。

四十四階層より下は魔境だった。

だんだんと狭まっていくのに、敵の数が変わらない。所狭しと現れるモンスターの群れ
が行く手を阻み、間断なく戦闘が続いた。

魔法を使うネズミや、奇怪な言葉をしゃべりながら、裸の人間のような姿で迫ってくる
アンデッドなど、どれも見たことがない敵だった。

四十六階層を超えると敵のレベルは42に跳ね上がった。四十階層より下は三階層ごとに
敵のレベルが4上昇している。

「数は多く、敵が強い、おまけに通路も細いときている。詰め込みすぎだ」

「大きな動きが取りづらいですね」

隣にいるリリスと雑談をしながら、サナトは《ウォーターランス》を放った。

槍形状の魔法は貫通効果を持つ。遠方にいるモンスターを貫き、さらに奥で何匹もの断
末魔が響いた。

リリスが感心したようにサナトを見つめる。

「狭い場所だと《ファイヤーボール》より使いやすいですか？」

「《ファイヤーボール》は燃え広がるからな。細い道だとリリスが敵を見失うだろ」

「あつ、マスター、後ろに敵が来たよ」

「了解。毎回毎回、どこから現れるのやら」

振り向かず《ウォーターランス》を放った。

狙いが外れることはない。

《神格眼》による広範囲な視野は背後も含む。そして敵の指定はルーティアが担当している。

「ご主人様おひとりでも突破してしまいそうですね」

「そんなことはないさ。俺だけだとさっきの人間みたいなアンデッドが迫ってきたら逃げ
出すかもしれない」

わざとらしく肩をすくめたサナトを見て、リリスが小さく笑う。

「もしかして、あの時ちよっとびつくりされました？」

立ち読みサンプル はここまで